埼玉大学経済学部　社会環境設計学科　教授
日本建築学会　地球環境委員会　委員長
外岡　豊（とのおか　ゆたか）

緑のエッセー

持続可能と林業

持続可能とは何か。国連ブルトラント委員会（1987）の定義は「将来世代のニーズを損なうことなく現在の世代のニーズを満たすこと」であるが、物足りない定義である。

私が理解するsustainableという言葉の本来の意味は遠い過去と遠い未来の間に緊張した糸を張ってつなぐような「永続性」を示しており、持続可能社会とは、仮に人口一定として「気候等の自然条件が変わらない限り、永続的に存続可能な人類の生き方」である。

将来世代が数世代先程度なら資源浪費を続けていても持続可能になってしまう。農耕社会一万年の歴史からすれば向こう一万年継続できるようでなければ持続可能とは言い難い。真の持続可能とは地球を余計に痛めることなく、それによって人類がより長く存続できるように、種の存続への希求に沿った生き方なのである。化石燃料、原子力、鉱物資源に依存して歴史的に見れば異常な消費を集中して地球環境に脅威を与えている現代文明がその反対の極致にあるのは言うまでもないが、枯渇しない資源の代表格は太陽エネルギーである。農業も林業も牧畜もその生産力の源泉は太陽であり、風力、波力、潮力には天体の引力も少し影響しているが、バイオマス燃料も元は太陽エネルギーである。そこで、持続可能社会とは「主として太陽エネルギーとそれにより形成された自然資源を人間の知恵と労働で最大限に活かして営まれる人間生活の総体である」と再定義しよう。この定義を象徴する新語を作った。sunとsustainableを重ね合わせてsunstainable、すなわち太陽エネルギーに依拠した持続可能性を意味する。

五穀豊穣を祈念して大和の地の真東に伊勢神宮を御祭りし、二十年毎に建て替えることで技術の伝承による持続可能を仕組んだ日本は大和朝廷の時代からsunstainableを希求した社会であった。

江戸時代中期の農本主義者、安藤昌益は海里は魚と塩田、平原里は米穀、山里は陸穀、深山は木材を主に生産し地域で生産できないものを互いに交易してどこでも普通に暮らせるようにせよと唱えた。健全な自然資源を基盤とし、よく耕された田畑とまともな自律的な人達から成る健全な社会、それらが三位一体と成って形成された理想社会を「正世」と呼んだ。その思想は先駆的な持続可能社会論であった。このように古来日本は持続可能先進国だったのである。

日本は人口も多く、工業先進国でありながら国土の森林面積率は約7割と高く有数の森林国である。その日本で森林蓄積量49億㎥（2012年）があるのに林業が疲弊しているのは奇妙である。ではsunstainable社会に向けて今、何をすべきか。林業の再生なくして日本の森林保全はありえないが、健全な森林なくして国土の保全もありえず、盤石な国土なくして日本列島で安心して暮らす事はできない。すなわち林業の復興とそれによる法正林の形成は21世紀後半に向けた日本の持続可能な安定生活の形成のために必要不可欠であり、早く林業経営を再生させることが喫緊の課題である。

●プロフィール
埼玉大学経済学部社会環境設計学科教授　工学博士（早大）
兼務：早稲田大学理工学研究所招聘研究員
専門：エネルギーと環境、気候変動対策、大気汚染対策
とくにエネルギー需要分析と温室効果ガス等排出量推計
現在：日本建築学会地球環境委員会委員長
伝統木造住宅はじめ国産木材の建築用途利用促進活動中
低炭素社会推進会議（19団体で設立）幹事
森街連携会議、NPO・EEハーモニー代表
エコステージ協会理事、日本都市問題会議世話人、他
環境省、埼玉県、さいたま市等環境関係審議会、検討会委員歴任
Imperial College London Visiting Professor、
大連理工大学、西安交通大学客座教授、歴任